



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語数量詞の多層的構造と機能に関する総合的研究
Author(s)	張, 琴琴
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16969号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16969
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99813
Type	doctoral thesis
File Information	Qinqin_Zhang_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 張 琴 琴

学位論文題名

日本語数量詞の多層的構造と機能に関する総合的研究

本論文は、5部12章よりなる、日本語の数量詞に関する運用・意味・統語構造・形態・音韻などを多角的に考察した論考である。第1章と第12章は序論と結論であり、主たる論考は第II部の形態論的・語彙論的分析（第2～4章）、第III部の意味論的・統語論的分析（第5～9章）、第IV部の語用論的分析（第10～11章）の3部10章である。以下、各章の趣旨を順に述べる。

第1章では、本論文の構成や研究課題の概略を述べる。

第2章では、数量詞を形式と意味の面から検討し、従来の特定数量詞と不特定数量詞に準特定数量詞というカテゴリを加えることで記述の枠組みを厳密にし、精緻な分析を施している。特に、副詞（的要素）や副助詞を伴う特定数量詞が値域の拡張や不明瞭化によって全体として準特定数量詞として振る舞うこと、「6～8本」のように二値とその中間を指す概数も準特定数量詞に含まれることなどが、論考の出発点として整理されている。

第3章では、数詞の形態をまず語種ごとに整理している。日本語の数詞に和語系列と漢語系列があり、両者が混用されていること、和語系列は基本的に被覆形であることは以前より指摘があるが、本論文では混用の細かな実態を記述しており、加えて、英語や英語以外の外国語が用いられることについても記述し、論考の対象にしている。語種切替は和語から漢語へ転じるものだが、3に第一段階の切替があり、5に第二段階の切替がある一方、9までは漢語系列のみ、和語系列のみで一貫するものがあることをデータから確認した。

第4章では、形態音韻論の枠組みで概数数量詞の形式を隣接型と非隣接型とに分けて記述分析している。隣接型には、2つの自立形式を倚辞でつなぐ3つのタイプと全体が複合語に近い構造を持つタイプがあることを指摘している。また、辞書項目に用例が示されているものは「5・6冊」のような組み合わせで、それより大きい数になると用例が乏しいこと、「5・6つ」などの表記では意味から「いつ[つ]むっつ」のように存在しない形態素を補って読み上げることも確認している。非隣接型は、二値が小から大への配置と「から」による接続が原則であるが、近似しない数値を並べることも不可能ではない。

第5章は、数量詞の種別によってどのような意味機能差が生じるかを考察している。連用数量詞文と連体数量詞文の意味が異なることは以前より指摘があるが、これを存在数量詞と非存在数量詞という概念でより精緻に説明することを試みている。存在数量詞は、存在物の数量を表すだけではなく、存在物であってもそれが構成素や属性と見なされている場合は、非存在数量詞となることも確認して分析をしている。連用数量詞が先行研究でいう未定の単位を表すだけでなく、全体として動作量と解釈できる、動的・可変的数量として表示されていることも論証しており、さらに、既定的単位の認知に文化的要因が関わること、「多く」「たくさん」などの不特定数量詞に原則通りでないふるまいが見られることも指摘している。

連体数量詞文とペアを形成できる連用数量詞文は、数量詞が主格名詞句か対格名詞句の数量を表すときに原則として限定されることからわかるように、連用数量詞が動作量を表す場合でも、動作量が反映するのは主語か目的語の数量であるが、これがアスペクト解釈との関係からどのような特性を持つかを掘り下げたのが第6章と第7章である。第6章ではまず、先行研究におけるアスペク

トまたアクチオンスアルト解釈について主要なものを整理したのち、被動性と他動性といった意味論的特徴に着目して、他動詞と自動詞の新たな下位区分案を提案している。次にこの枠組みに基づいて、数量詞句の付加で限界性解釈が変化したり、解釈を誘導したりする現象がどのように起こるかについて検証を行い、結果をまとめている。加えて、動詞のアクチオンスアルトのタイプと文脈などの語用論的要因によって限界性解釈が影響を受けることを指摘している。続く第7章では別の角度から動詞を意味特性で区分し、連用数量詞の中にも変化過程における蓄積的達成量としての変化量を表すとは解釈しにくく、(完了まで含めた) 動作全体の評価的達成量と解釈される例があることなどを指摘している。連体数量詞・連用数量詞の対応関係を、両方成立するもの、前者のみ成立するもの、後者のみ成立するもの、に分けて検討を加えている。たとえばテイルは未完了と完了の意味を分化させれば、解釈を調整しながら成立することなど、興味深い指摘をした上で、アスペクト形式と対応関係を連体数量詞文・連用数量詞文に区分して整理した。

第8章は数量詞と指示性(主に、照応・文脈指示の特性)を論じている。従来、既定的認知に基づく連体数量詞のほうが指示性を持ちやすいことは指摘されていたが、本章では、数量詞が単独で指示性を有する条件を分析している。連用数量詞は指示性を持たず、指示性解釈を持たせようとすると不自然になりやすいこと、指示詞単独で名詞句として指示性を持つ場合は、主に人間が指示対象であるが、非情物でも可能な例があること、「その」などの指示性を持つ連体詞が前接すると名詞句としての特性が明確になり、連用数量詞にはならないこと、などが指摘されている。

続く第9章では、数量詞単独(いわゆる裸の数量詞)が指示性を有することで代名詞に近い意味機能を持つことを改めて指摘し、この場合は照応用法のほかに直示用法も多く見られることを論じている。照応は前方照応が圧倒的に多いが後方照応も少ないながらあること、人間など有情物の用例が多いが非情物についても同じ原理で説明可能なこと、数量詞単独では直示性が弱く連体詞を前接させないと成立しにくいこと、などを主張している。

第10章は「第IV部 語用論的分析」の前半をなし、概数表現の語用論的機能を論じている。特定数量詞に「およそ」や「くらい」を付加して概数化する概数表現は、あえて厳密な数値を示さず、幅を持たせた数量(域)と示すのには、一定の動機があると本論文は分析する。命令や依頼では、厳密な数値を示してしまうと聞き手に対する行動上の負荷が大きくなり、過大な圧迫たりうる(強いFTAs: face-threatening actsになってしまう)ので、聞き手の自由裁量を確保するネガティブ・ポライトネスの方略を用いる必要が生じる。この場合、一種の対人語用論の方策として概数化が機能することになる。情報内容を提示する(いわゆる *constative* な)発話においても、厳密な数値の提示は正確でなければならないそれは直に発話者の責任や信用に影響を与える。守るべき発話の質の確保と情報精度は相反する面があり、粗略性を利用するコミュニケーションになりやすい。また、厳密な数値などは話者にとっても聴者にとっても記憶上の負担が大きくなるので、認知上の要因も大きく関わると主張している。

第11章は「お一人」など、接頭辞を付すことで尊敬表現化する現象について、ひろく接頭辞「お」と「ゴ」の対立、接頭辞を付さない例などを検証し、ここでも「お三方」「五名様(*ご五名)」へと切り替えられる点で混用が生じる同じ傾向が見られること、「お二つ」までは一般的だが「お三つ」は使用例がほとんどないことなど、を確認している。

第12章では、全体を振り返ってまとめ、残された課題を確認している。

以上